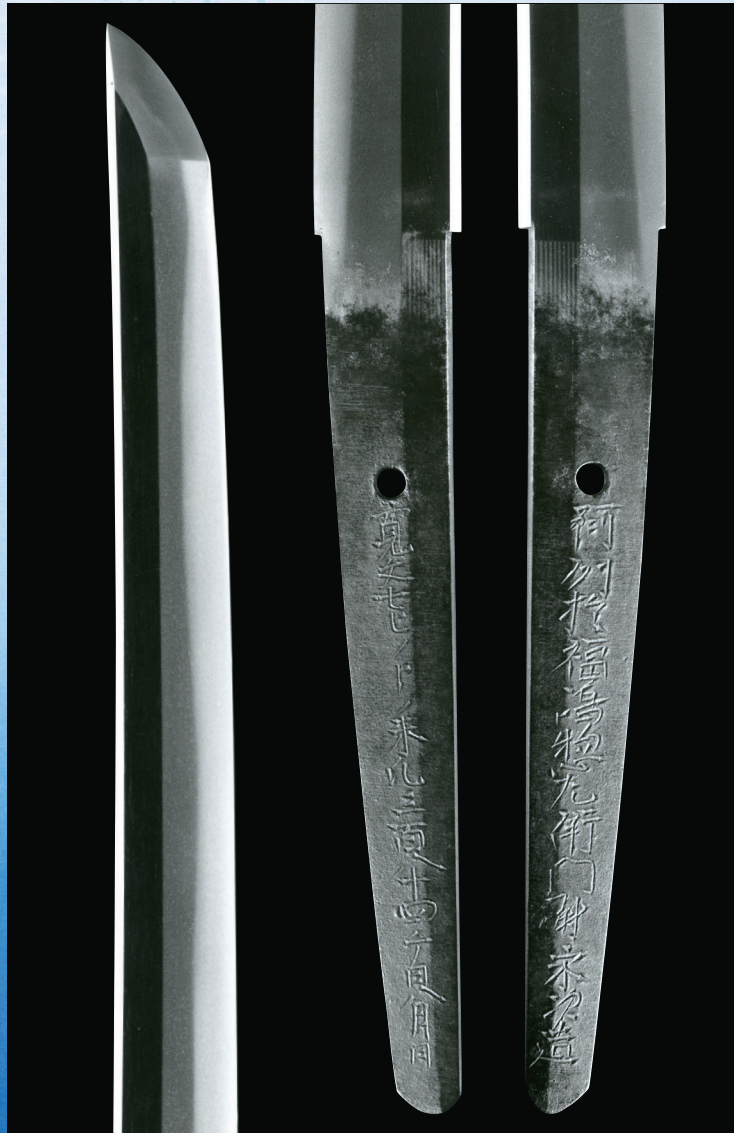


## ニュース



## 刀

銘（表）

寛文七ヒノトノ末凡

三百八十八日八月日

（裏）

阿州於福島惣左衛門

尉永次造

阿波国では、戦国時代に海部川流域で刀剣の生産がはじまったといわれ、江戸時代には国内各地で刀工の活動がみられました。写真の刀は、寛文7年（1667）に徳島城下の福島ふくしまの地で永次ながつぐが打ったものです。永次は本名を岡本栄次おかもとながつぐといい、いまの板野郡板野町の生まれです。

博物館では、部門展示「博物館所蔵の刀剣」（2019年12月3日（火）～2020年2月16日（日））を開催し、館蔵の刀剣を展示しますのでぜひごらんください。

（美術工芸担当：大橋俊雄）

# 徳島藩と大井川

— 徳島藩家老が寄進した石碑探訪 —

松永友和

図1は、「東海道名所図会」に描かれた大井川の挿絵です。挿絵には、川越えをする人や馬が描かれ、左上には富士山も見えます。江戸時代、大井川には橋が架けられることはなく、参勤交代で江戸に向かう大名や旅する庶民にとって、大井川は交通の難所の一つでした。徳島県を流れる吉野川（長さ194km）と同様、しばしば洪水・氾濫を引き起こし、大井川の治水は江戸幕府にとって重要な課題でした。現在、あまり知られていませんが、その治水事業に徳島藩が関わっていました。

以下では、徳島藩と大井川との関わりや徳島藩ゆかりの石碑について紹介したいと思います。



図1 「東海道名所図会」に描かれた大井川（寛政9年（1797）刊、当館蔵）

## 1. 徳島藩による大井川御手伝普請

南アルプス（標高3,189mの間ノ岳）に水源をもつ大井川（長さ168km）は、駿河国と遠江国（ともに現在の静岡県）の国境を南下し、駿河湾に注ぎ込む大河です。

享保21年（1736）1月12日、徳島藩7代藩主蜂須賀宗英と陸奥国盛岡藩7代藩主南部利視は、江戸幕府8代将軍徳川吉宗の命として、老中松平乗邑から大井川御手伝普請（堤防などの改修工事）

を命じられます（『徳島県史料第1巻 阿淡年表秘録』383頁）。徳島藩は図らずも盛岡藩と共同で普請（改修工事）を行うこととなりますが、その背景には、幕府が命じていた駿河国田中藩と遠江国掛川藩による堤防の再築が改修と破損をくり返し、治水の効果があがらない状況があったようです。

徳島藩では総奉行に徳島藩家老で稲田家7代当主の稲田九郎兵衛植政（2月5日～3月5日）、次いで家老で山田家6代当主の山田貢宗賀（なお、蜂須賀重喜の藩政改革に反対し切腹を命じられたのは、7代当主の山田織部真胤です）（3月5日～4月8日）を任命し、現地に赴かせて普請の差配にあたさせます。実際の普請では、江戸幕府の勘定奉行所御普請方が作成した仕様書に基づき、徳島藩と盛岡藩が施工しました。徳島藩が堤の普請を担当した区域は、河口から約10kmまでの下流側で、盛岡藩はその上流側の約10kmを担当しました。さらに徳島藩は、弁天山付近を「メ切」という難工事を行ったようです。

普請にともなう費用は、幕府の見積りでは4,864両でしたが、実際には見積額を大きく上回ったとされます。いずれにせよ、多額の工事費を捻出するために徳島藩が行った政策は「半知」、すなわち藩士の俸禄の半分を召し上げるといった厳しいものでした。享保21年4月8日（4月28日に元文に改元）、徳島藩は江戸幕府から命じられた大井川御手伝普請を無事行い、9日に幕府役人の見分を受け、事業は完了しました。

徳島藩にとって、大井川御手伝普請は過重な負担になりましたが、そこから得た治水技術や施工のノウハウは、宝暦2年（1752）に着工された第十堰の建設工事に寄与したと推察されています（澤田健吉「徳島藩の大井川御手伝普請—吉野川の第十堰普請とのかかわり—」、『徳島科学史雑誌』5、1986年）。

## 2. 徳島藩家老が寄進した手水鉢 ちようずばち

大井川に架かる谷口橋の南詰から西へ約300m進むと、小高い弁天山があり、山上に弁天社（水神社）があります（図2）。その弁天社に通じる石段の登り口に、石製の手水鉢があります。（図3、4、5）。表面の一部が剥落していますが、現在も失われることなく、大切に伝えられています。手水鉢には、「稲田九郎兵衛 山田貢 喜捨」、「元文元丙辰年五月十日」とあります。すなわち、手水鉢は、現地で普請を担当した稲田・山田の両家老が、工事の完成を記念して弁天社に寄進したものでした。

今回は、徳島藩による大井川御手伝普請と徳島藩家老が寄進した手水鉢について紹介しました。実は、この手水鉢については、山川浩實（元当館学芸員）が、「文化財亡佚の危機」（『徳島県博物館館報』No23、1975年）で紹介しています。若き日の山川学芸員が現地で手水鉢を確認してから45年を経た現在、今なおその手水鉢は遺し伝えられ、大井川の治水事業に徳島藩関わった歴史



図2 弁天社（水神社、静岡県島田市阪本、写真はすべて筆者撮影。2018年6月）



図3 弁天社へ通じる石段の登り口に手水鉢がある。

的事实を雄弁に物語っています。これからも大切に後世へと伝えられることを願っています。

（歴史担当）



図4 手水鉢の側面に、「稲田九郎兵衛 山田貢 喜捨」（写真上）、「元文元丙辰年五月十日」と刻まれている。



図5 徳島藩家老稲田九郎兵衛と山田貢が寄進した手水鉢。現在、地元の有志によって解説看板が建てられている。

令和元年度 部門展示

# 博物館所蔵の刀剣

阿波国<sup>あわ</sup>で生産された刀剣は、戦国期には切れ味のよさが賞され、近世には徳島藩<sup>とくしまはん</sup>の武士<sup>りょう</sup>の差し料<sup>りょう</sup>として重宝されました。また海部包刀<sup>ほうとう</sup>のようなきわめて異風なすがたのものも造られています。

当館では、こうした地元での作を中心にして刀剣を収蔵しています。今回の部門展示では、それらのおもなものを展示します。

## <期間>

2019年12月3日(火)～2020年2月16日(日)

## <休館日>

毎週月曜日(1/13は開館、1/14(火)は休館)、  
12/31(火)～1/4(土)

## <場所>

博物館2階常設展示内の部門展示(人文)

## <観覧料>

一般200円、高校・大学生100円、小中学生50円

祝日・振替休日はどなたさまも無料/高齢者(65歳以上)は無料/土・日曜日は小・中学生及び高校生は無料/学校教育による利用は無料/障がい者とその介助者1名は無料/20名以上の団体は2割引

## <展示解説>

①2019年12月15日(日) 14:00～15:00

②2020年 1月12日(日) 14:00～15:00

※観覧料が必要



刀 銘 (表) 長船彦兵衛尉 於阿州作之  
(裏) 文禄三年八月日



刀 銘 泰長

# 暖かい森の木になるシダ ～ヘゴ～

薄暗い湿った森の中には、落ち葉が厚くつもっている。足元を気にしながら、さらに森の中にわけ入る。うっそうとした森。ふと見上げると、目の前に大きな葉が見えた（図1）。“ヘゴだ！すごい大きいなあ！”ヘゴは、暖かいところに生えるシダで、熱帯地方に多く見られます。そう、ここは熱帯のジャングル…ではなくて、なんと徳島県!?県内でこんなに立派にヘゴが育つなんて、本当に驚きました。

私達がふつうに目にするシダは小さな草です。ヘゴは、シダなのに木のように幹があって、高さ4mになり、巨大な葉は長さ2mにもなります（図2、3）。まるでヤシのように見えますが、ワラビやゼンマイと同じシダなのです。ちなみに、恐竜のいた時代には、ヘゴのように木になるシダがたくさん生えていたことが知られています。ヘゴは、熱帯から亜熱帯に多く、日本でも沖縄や奄美地方にはたくさん生えています。紀伊半島南部や八丈島を北限とし、四国、九州南部、屋久島より南でみかけられますが、紀伊半島や四国では、せいぜい膝下程度の大きさです。寒さにとても弱く、小さいうちに枯れてしまうため、木のように大きく育つことはほとんどないそうです。

実際に、徳島県内には、これまでも記録があり、私も見たことはありました。けれども、いずれも地面から葉っぱが2～3枚出ているだけの小さなものばかりで、人の背丈を越えるものを見たのは初めてでした。珍しい植物なので、生えている場所は言えませんが、徳島県内にこんなに立派なヘゴが育っているなんて、本当に嬉しいことです。

徳島県には、高い山にあるシコクシラベやウラジロモミなどの林から、平地のシヤカシの多い森、そして県南の温暖な森まで、さまざまな環境があります。剣山などに見られる高い山々の森は人々をひきつけ、よく話題になります。でも、じつは徳島県の南の森には、沖縄の植物学者に話すと「えっ、そんなものが生えているの！」と、逆に驚かれるようなものが、いろいろと生えているのです。もっと注目して欲しい故郷の宝だと思っています。

(植物担当：茨木 靖)



図1 ヘゴの生える森。左上がヘゴ。人物は案内して下さった地元研究者の成田愛治さん。



図2 ヘゴ。幹が伸びているのがわかる。



図3 葉も巨大。

# 太宰府天満宮のおふだ

新元号「令和」も2年になろうとしています。「令和」の典拠は『万葉集』に収められている「梅花の歌三十二首 序文」にあり、この「梅花の歌」が詠まれた地として、福岡県の太宰府が話題になっていることを皆さま覚えていらっしゃるでしょうか？

当館の収蔵資料の中に、令和ゆかりの地とされる太宰府にある、天満宮の古いおふだを発見したので紹介したいと思います。

太宰府天満宮から配られたと考えられるおふだは十数枚あり、現在のところ3種類を確認しています(図1)。いずれも阿波市土成町の民家の納屋に、他たくさんのおふだと一緒に残されていたものです。図1右は、「安楽寺天満宮 御祈祷 別當 浦之坊」と刷られた紙に「奉修天満神本地 供 家門繁昌 息災延命 祈攸」の内符がつつまれています。その上に、「天満宮 御守 別當 浦之坊」が重ねられ、水引がかけられていました(図2)。図1中央は「安楽寺 天満宮御梅守」で、中に天満神守護と朱書きされた紙につつまれた梅の種(と思われるもの)が入っていました。図1左は「太宰府 天満宮御守 小野伊予守」と記されています。

調べてみると、太宰府天満宮は、菅原道真の祠廟、そして「安楽寺」として創建され、明治政府による神仏分離で安楽寺が廃寺になるまで、神仏習合の「安楽寺天満宮」あるいは「天満宮安楽寺」と称されていたことを知りました。また、組織に役職があり、図1、2のおふだに見える「浦之坊」は五つあった別当家の1つ、「小野伊予」は三つあった文人の家の1つで、太宰府天満宮周辺に居を構えていたことが絵図などで確認できました。

近世頃に、この役職にあたる家が宿坊として天満宮に参拝する人の宿になったり、全国におふだや梅御守を配るようになったとされています。土成町に残されていた安楽寺天満宮のおふだは、おそらく太宰府天満宮の浦之坊や小野伊予家から人が来て、配ったものと考えます。

今後より詳しいことを調べ、企画展などで紹介したいと考えています。

(民俗担当：庄武憲子)



図1 太宰府天満宮から配られたと考えられる3種類のおふだ。



図2 図1右のおふだを分解したもの。左が中央のおふだに包まれていた内符、右がその上に重ねられていたもの。



図3 「太宰府観光が이드まっぷ」(部分) 2018年12月発行  
現在天満宮参道にある小野筑紫家は、図1左のおふだに見える小野伊予の子孫の家だそうです。

# 弥生時代や古墳時代には、どのような方法でお米を炊いていたのですか？

弥生時代になると日本でも米作りが始まることは、よく知られています。しかし、この時代の炊飯方法については、あまり説明されていないかもしれません。

近年、北陸学院大学の小林正史教授らが、東南アジアなどの伝統的な調理方法の調査と、土器についてのススコゲなどの調理痕跡の分析や調理実験を組み合わせ、食文化史の研究を行っています(小林編2017など)。今回は、その研究成果をもとに質問にお答えしましょう。

現在、私たちが土鍋で米を炊くときには、あらかじめ水に浸した米と、米の量よりやや多い水を鍋に入れて蓋をして炊く「炊き干し法」とよばれる方法を用います。これに対して、伝統的な東南アジアの炊飯方法は、「湯取り法」という方法が多いことが明らかにされています。これは、鍋に米と多めの水を入れて沸騰させた後に、鍋を傾けて余分な煮汁を捨て(湯取り)、その後、側面を加熱して蒸らす方法です。

弥生時代から古墳時代前期には、日本列島ではまだ竈は導入されておらず、炉の上に土器を置いて調理をしていました。また、炊飯用の土器には、鍋を斜めにして煮汁を捨てた際の吹きこぼれの痕跡(図1)が見られることから、東南アジアの例と同じように「湯取り法」で米を炊いていたと考えられます。さらに、土器の側面には、連続するコゲの痕が残っており、これが湯取り後に炭火の上に土器を転がして米を蒸らした痕跡と考えられ

ています(図2)。徳島の古墳時代初めの土器でも、このような痕跡が確認されており、「湯取り法」で米を炊いていたことがわかっています(三阪ほか2019)。ススコゲに注目して博物館の土器をながめてみると、新たな発見があるかもしれませんね。  
(考古担当：岡本治代)

## <引用文献>

小林正史編2017

『モノと技術の古代史 陶芸編』吉川弘文館  
三阪一徳、近藤玲、小林正史2019

「古墳時代開始期の徳島県域における炊飯方法の変化」(考古学研究会第65回総会 ポスターセッション)



図1 土器に残る吹きこぼれの痕跡  
石井町石井城ノ内遺跡(三阪ほか2019掲載図を一部改変、徳島県立埋蔵文化財総合センター蔵)

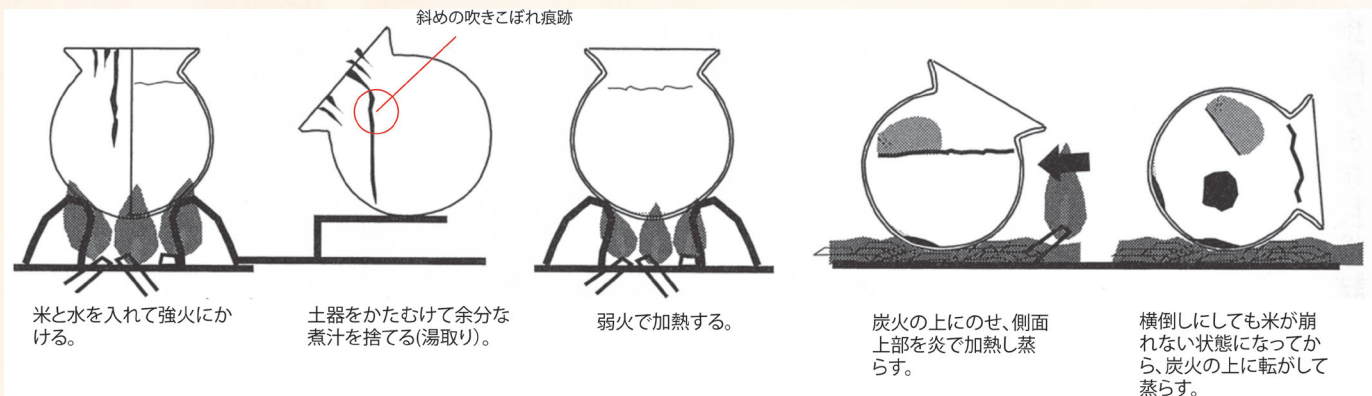


図2 「湯取り法」による炊飯方法(古墳時代前・中期の西日本)(三阪ほか2019掲載図を一部改変)

シリーズ名	行 事 名	実施日	実施時間	申込	対 象 (定員)	備 考
歴 史 散 歩	渋野の古墳見学	3月15日(日)	13:30~16:30	要	小学生から一般(25)	現地集合
野外生きものかんさつ	初めての植物かんさつ(新春編)	2月 8日(土)	13:30~15:30	不要	小学生から一般	同日開催 [ゼロから始める植物学]
	冬の昆虫ウォッチング	2月23日(日)	13:30~15:30	要	小学生から一般(20)	
生きものしらべ隊	電子顕微鏡で昆虫を見よう！	3月 8日(日)	13:30~15:30	要	小学生から一般(15)	
	タンポポを調べよう	3月22日(日)	13:30~15:30	不要	小学生から一般(30)	
たのしい地学体験教室	アンモナイト標本をつくろう	2月16日(日)	13:30~15:30	要	小学生から一般(20)	材料費300円 (高校生以下は不要)
ワクワクむかし体験	拓本をとろう	1月26日(日)	13:30~16:00	要	小学生から一般(15)	
ミュージアムトーク	ゼロから始める植物学~標本整理編~	2月 8日(土)	10:30~12:00	不要	小学生から一般	同日開催 [初めての植物かんさつ]
部門展示関連行事	部門展示 「博物館所蔵の刀剣」展示解説	1月12日(日)	14:00~15:00	不要	-	観覧料必要
	部門展示 「阿波晩茶の製造技術と製造用具」展示解説	3月20日(金祝)	14:00~14:30	不要	-	祝日無料
博物館スペシャル	文化の森ウィンターフェスティバル	2月11日(火祝)	9:30~16:00	不要	-	祝日無料

◎小学生が参加する場合は保護者同伴です。 ◎全ての行事が「文化の森教室」に該当します。

普及行事のお申し込みについて

- ◎1枚の往復はがきで、1行事のみ申し込むことができます。
- ◎行事日の1か月前から10日前までに、必着でお申し込みください。
- ◎返信用はがきの住所・氏名を記入してください。
- ◎希望者が多数の場合は抽選とし、詳細は当選された方にお知らせします。
- ◎原則として、参加費は無料です。
- ※お問い合わせは、徳島県立博物館まで(電話 088-668-3636)
- ※10月1日より、はがきの料金が値上げされております。

往復はがきの記入例

<往信の表面>	<返信の裏面>	<返信の表面>	<往信の裏面>
63 〒770-8070 往信 徳島市八万町 向寺山 徳島県立博物館	何も書かないで ください	63 〒00000000 返信 あなたの 郵便番号 住所 氏名	1.参加希望の 行事名 2.参加希望者 全員名 (学年・年齢) 3.住所 4.電話番号

特典がいっぱい!!  
博物館友の会に入会しませんか!

博物館友の会は、体験活動を通して、自然や歴史・文化について、楽しく学んでいます。みなさんも参加してみませんか!

- 年会費・個人会員2,000円  
・家族会員3,000円  
(10月以降、年会費がそれぞれ半額となります。)

■会員の特典

- ・博物館の企画展と常設展を無料で観覧できます。
- ・友の会行事に参加できます。
- ・友の会の出版物やミュージアムショップの商品を、1割引で購入できます。
- ・催し物案内や博物館ニュース、会報などが、毎月お手元に届きます。



友の会行事の集合写真

※詳しくは、友の会事務局まで (電話088-668-3636)



学校教育に博物館を!

徳島県立博物館のもつ資源(モノ・情報・人)を、学校教育の場で有効に活用していただきたいと思います。

- 遠足
- 館内授業(博物館で)
- 出前授業(学校で)
- 博物館資料の貸し出し
- 教材研究のお手伝い
- ・学習内容に関する質問や実験・観察の方法など、何でもお気軽におたずねください。
- ・動物、植物、地学、考古、歴史、民俗、美術工芸といった専門分野の学芸員がご相談に応じます。まずは、お電話を。



出前授業(火おこし)

※お問い合わせは、徳島県立博物館まで(電話088-668-3636)

上記お問い合わせは、徳島県立博物館まで(電話 088-668-3636)